

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 28 日現在

機関番号：28002

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K10437

研究課題名(和文) 島しょのユイマールを活かした在日外国人母子もいる子育て支援モデルの構築

研究課題名(英文) Creation of a childcare support model that also includes foreign mothers and children living in Japan, utilizing the YUIMARLU of the islands.

研究代表者

西平 朋子(NISHIHIRA, TOMOKO)

沖縄県立看護大学・別科助産専攻・教授

研究者番号：20326507

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、離島という限られた資源の中で在日外国人母親の子育てを支援している看護職者にみられる社会的相互作用を明らかにすることであった。A県離島の在日外国人母親を支援している看護職者の看護実践には、彼女達を「島に来てくれた大切な女性であると同時に特別な配慮が必要な存在」と理解し、「様々な手段を活用して情報を拾う」「見守りつなげる工夫」をしながら「地域の資源を活用する」という地域との社会的相互作用が存在していた。看護職者は島の利点を活かしながら、母親だけに子育てを任せない地域全体を巻き込んだ子育て支援を実践していた。実践上の課題として「異文化を理解した支援の難しさ」「言葉の壁」が語られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の結果から、看護職者が行う在日外国人母親の子育て支援の実践には、行政・病院・学校・地域の住民組織などと連携し、地域全体を巻き込みながら展開されている「地域との社会的相互作用」が含まれていた。今回の結果は、今後増加が予測される在日外国人母親を地域で支援する際の貴重な資料であり、在日外国人母親の母子保健の向上につながるものとする。さらに新型コロナウイルス感染症によって外出制限や自粛等を余儀なくされた。その結果「巣ごもり育児」によって親子の孤立や育児不安感の増大が問題となっている。母子が地域とつながりながら安心・安全な子育てを実現するための支援を考える際の一助になると考える。

研究成果の概要(英文)：Pregnancy and childbirth are physiological processes common to all races and ethnic groups. However, the subsequent child-rearing process is strongly influenced by the mother's own cultural and social background. The nursing practice of nurses who support foreign mothers living on remote islands in A Prefecture is based on the understanding that they are "important women who have come to the island and at the same time need special consideration," and on the concept of "utilizing various means to gather information," "watching over them and connecting them," and "devising ways to help them. There existed a social interaction with the local community, "utilizing various means to pick up information," and "making use of local resources" while "devising ways to watch over and connect them. The nurses were practicing child-rearing support that involved the entire community and did not leave child-rearing to the mothers alone, while taking advantage of the advantages of the island.

研究分野：母性・助産

キーワード：在日外国人母親 子育て 島しょ 地域づくり

## 1. 研究開始当初の背景

全国でも有数の島嶼県である A 県の離島の特徴として、15 歳以上 64 歳未満のすべての男女別年齢別人口で男性の割合が高くなっている (沖縄県企画部, 2015)。男性特に長男は位牌の継承や親の介護のために出身離島に戻るが、女性は出身離島には戻らず島外で生活するため女性の島外流出による配偶者不足が起こっていると推察される。

A 県の在留外国人の在留資格別では、「日本人の配偶者」が第 3 位となっている。夫日本人、妻フィリピン人の組み合わせが最も多く、移住地では離島が多い (総務省, 2016) ことから、A 県の離島では男性の配偶者不足による結婚難を解決する方法の一つとしてフィリピンや中国などアジア諸国の女性との国際結婚が行われていることが推察される。

仲里 (2013) は、沖縄県在住のフィリピン人女性のコミュニケーションに焦点を当てた生活実態調査からフィリピン人母親女性を受け入れる日本人家族と女性の間には価値観や認識のズレがあり、それがストレスの原因となっていることを報告している。これまでの在日外国人母親の子育てに関する研究では、言葉や文化の違いから起こる困難についての報告が多い (佐竹・ダイノイ, 2006; 武田, 2011)。

助産の対象となるすべての人びとが地域で安心して子育てをするためには、母国の習慣や伝統も尊重されつつ必要なケアが受けられるような支援体制が必要であると考えられる。

在日外国人母親が、離島という限られた資源や環境という欠点を強みに代え、さらに言葉や文化の違いを乗り越えて子育てを実践していくためには誰とどのような社会的相互作用が展開されているのかが明らかになれば、今後増加が予測される在日外国人母親の子育て支援に寄与できるのではないかと考え本研究の着想に至った。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、在日外国人母親が自己の育ってきた文化・慣習・環境と異なる A 県の離島で、いかにして子育てを実践しているのか、課題は何かを明らかにすることであった。生態学的視点と社会的相互作用の視点を踏まえたインタビュー調査を実施し、「離島という限られた資源や環境の中で、在日外国人母親は誰とどのような社会的相互作用を展開させながら子育てを行っているのか」を明らかにすることであった。

## 3. 研究の方法

離島で在日外国人母親へ子育て支援を実施した経験のある看護職者 5 名へ「在日外国人母親への子育て支援」についてインタビュー調査を実施した。なお、研究協力者にはインタビュー開始前後で研究者の連絡先、研究目的と方法、研究への参加を拒否したことによって不利益を生じることがないこと、個人が特定されることはないこと、研究の目的以外には使用しないこと、さらに研究期間中や研究期間終了後 10 年間は適切に関連資料・データを保管しその期間が終了すれば適切な方法で破棄することなどを口頭で説明し同意を得た。

## 4. 研究成果

### 1) 研究協力者の背景

研究協力者は、保健師 3 名、助産師 2 名であった。保健師・助産師ともに離島での勤務経験年数は 3 年から 20 年以上であった。5 人とも島外出身者であった。現在も離島で勤務しているのは 2 人であった。

### 2) A 県離島における子育て支援の実践

離島で在日外国人母親へ子育て支援を実施した経験のある看護職者の看護実践には、在日外国人母親を「島に来てくれた大切な女性であり特別な支援が必要な存在」として対象を捉え、「様々な手段を活用して情報をひろう」「見守りつなげる工夫」「地域の資源を活用する」4 つのカテゴリーに分類できた。

#### (1) 「島に来てくれた大切な女性であると同時に特別な支援が必要な存在」

看護職者は、紹介業者をとおして嫁いできた在日外国人女性に対して、一般的に言われている否定的な捉え方ではなく、知り合いもない、言葉も異なる、生活の不便も多い離島に来てくれた大切な人と捉えていた。さらに母親の苦労や困難にも共感を示していた。

・一般的には、よく、外国からきた花嫁さんを「買ってきた花嫁さん」とかって言うけど、私はそうは思わない。よく来てくれたなーと、大切な人と思ってケアをした。国が違うからいろいろ支援は必要だと思う。

・島には若い人はどんどんいなくなるけど、この人たちは島で、の子どもを産んで、育てる大切な人。習慣とかが独特だったりするから、ちょっと注意はしている。確認とかは必要な。

・島の若い人は、(島から)出ていったら戻ってこないけど、この人たちは(島に)いてくれるし、ありがたい。大変なことも多いはずだけど、頑張っているよ。えらいと思う。自分だったらできるかな。

・島の人たちはみんな、この島の特徴かもしれないけど、来る人はウェルカム、ウェルカム、みんなそんな感じ。大事にするよ。排除するとかはない。

#### (2)「様々な手段を活用して情報をひろう」

離島は島民の生活に関する情報がいろいろな場面をとおして入手できるといった特徴がある。看護職者は、島の男性と在日外国人女性が結婚したという情報を地域の中で拾うと、今後予測される妊娠・出産・子育てを見据え様々な手段を活用して情報を得ていた。

・島は狭いから、なにかあればすぐに噂とか話題になる。〇〇さんのところ、外国の人と結婚したらしいよとか。〇〇さんのところのお嫁さん、おめでたみたいとか。いろいろな情報がいろいろなところから入ってくる。そこで、あーそうか、そうなんだね、とかになる。

・スーパーとかに行くと、その人に会うこともあるし。でもその時には、相手が合図をしてきたら自分も声をかける。声をかけてほしくない時もあるはずだから。で、次に会った時にそれとなく聞いてみるとか。

・地区に住んでいる保健師さんとはプライベートでもいろいろ話ができる。ここ、とっても保健師さんとも関係が近いからいい。気になっていることを伝えたり、逆に情報をもらったり…。連携がしやすい。

・エイサー仲間から、おうちの様子や子育ての様子を聞いたりする。旦那さんの様子とかも。

・島は小さいし、人数も少ないから、地域みんなが(在日外国人母親を)知っている。だからいろいろな人からいろいろな情報収集ができる。アンテナを張っているよ。

・だいたい健診には、義母と来ることが多いかな。質問しても義母がたくさんしゃべる。でもその時に本人の様子を見て、あれって思ったら、いったん義母に席を外してもらって、英語ができる医師がいたので、そこにつなげたりした。本人たち、質問したらあんまり理解してなくても「はい」って返事をするから。最初は気づかなかったけど、そのうち、わかってなくても返事は「はい」って答えるから。それに気づいてからは質問はオープンクエッションにしている。でないとアセスメントができないから。

#### (3)「見守りつなげる工夫」

看護職者は、母親だけに子育てを任せない地域全体で子育てをする風土が残っている島の強みを活かし、多職種とつながりながら見守る工夫をしていた。またいろいろな場所で、在日外国人母親の子育てを見守る工夫をしていた。

・地域(住民)のことをよく知っているのは、母推さん(母子保健推進員)や民生委員がよくわかるので、その人たちにもいろいろ協力してもらっている。健診の案内とか。あと、気になる時には、母推さんに様子を見に行ってもらったりして、民生委員さんに声かけたり。私達より地域を知っているの。つなげている。

・子どもが小さい時には、健診とかで様子が確認できるけど、大きくなると、子どもの学校行事や部活動とかで一緒になったりする。その時に声をかけて様子を聞いたりする。あと、地域の行事とか。そこで話を聞いて相談にのったりするかな。

・その人たちには、お友達っていうか、なんていうのかな、コミュニティーがあって。自分の国の言葉で話せる場も必要かなと思って、それで見守っている。集まってご飯食べたりしているみたい。時々、このコミュニティーでの様子とかも本人たちに聞いたりする。国によって習慣とかが独特だったりするから、必要な時はアドバイスをしている。

・妊娠届の時とかは、結構時間をかけて説明するかな。何かあったら相談に来るように伝えていいる。実際に相談に来た時には、ゆっくり話を聞いて、相談に来てくれてありがとうと言うようにしている。何かあった時の相談場所になればいいかなって。そうすると、実際にいろいろ相談に来てくれた。こんなのが大事かなって思う。

#### (4)「地域の資源を活用する」

看護職者は、異文化での子育てをしている母親が孤立しないように地域の資源を活用してい

た。また、地域行事等への参加を促しながら、母親と子どもが地域の一員として生活できるように関わっていた。

・妊娠中から保健師さんとはいろいろ情報交換をしていたかな。特にお産が近くなったら、ちゃんと島をでるようとか、準備がどうなっているとか、気になった時は。その時（お産で母親が不在になった時）の子どもたちのこととか。あと、お産が終わってから島に帰ってきた時のこととか。

・島には、今でもおせっかいおばさんのような役割をとる住民も多いので。そうすると困った時だけではなく普段から島の住民が気にかけてくれるし、声もかけながら子育てとかを支援してくれる。それって安心かなって。島の特徴だと思うんですけど、島のいろいろな人からのサポートって。これは都会にはない、島の大事な資源かなって、本当に。

・学校行事とか、地域の行事とかには頑張って参加するようになって言っています。健診だけじゃなくて。母推さんにも声掛けしてもらったり。そうすると、いろいろな人とつながってくれるかなと思って。〇〇さん家の子どもっていうより島の子どものかな。みんな（地域全体）で子育てをするっていう感じですかね。

・人口が少ないので、〇〇さん家の子どもだっていうのを地域の人の方がわかるんですよ。これって島だからこそですよ。これって宝ですよ。

### 3) A 県離島における子育ての課題

今回の研究協力者のインタビューから A 県離島における在日外国人母親の子育ての課題として「異文化を理解した支援」「言葉の壁」という2つが挙げられた。

#### (1) 「異文化を理解した支援の難しさ」

・これまでの B 国の女性が多かった。今はそれ以外の国からの女性も増えたため支援が難しい。B 国は A 県の県民性とよく似ている感じがするのでまだいいが、C 国はなかなかコミュニケーションや関係性を作るのに苦労したりする。気が付くと国に帰っていた（離婚）こともある。

・c 国の人は、島の人となかなかなじめず、状況の把握が困難。文化の違いなのか、感情的になるようで、なかなか難しい。

#### (2) 「言葉の壁」

・きっと、あの人達（在日外国人母親）も同じように感じていると思うんですけど、言葉の壁はあります。説明したことがちゃんと伝わったのかなってという心配はある。できるだけわかりやすい日本語で話すようにはしているんですけど。

・母子手帳とかは外国版を取り寄せたりしたんですけど。健診とか予防接種の問診は最初のころは白紙で。それで家族にお願いしたりしたんですけど。やっぱり言葉（の壁）はあるかな。

・保健指導とかでは、わかりやすい日本語とか、単語とか、ジェスチャーで説明するけど。確認すると「はい」と返事をするけど、わかってないとかあるので。

## 4. まとめ

今回は在日外国人母親を支援した経験のある看護職者へのインタビューを実施した。今後は子育て中の母親へのインタビューを行うとともに島の強みを活かした地域全体で見守る子育て新体制（図1）の構築に向けて取り組み、在日外国人の母子保健の向上に努めていきたい。

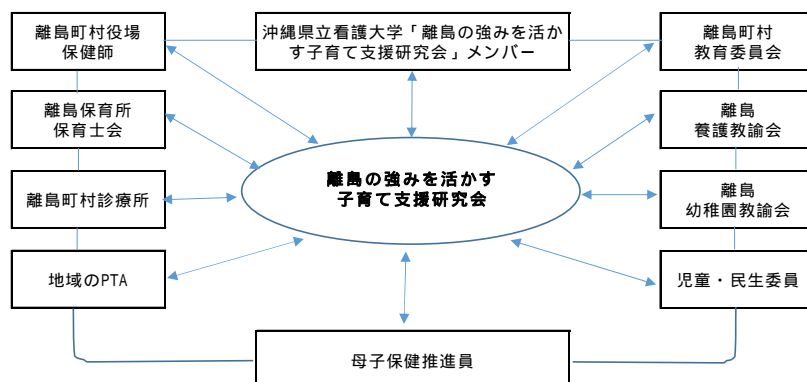


図1 離島子育て支援組織

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 TOMOKO NISHIHIRA
2. 発表標題 The Child-Rearing of Filipino Mothers Whose Positive Emotion was Cultivated by Reciprocal Caring
3. 学会等名 42nd Annual IAHC Virtual Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 TOMOKO NISHIHIRA
2. 発表標題 The Child-Rearing of Filipino Mothers Whose Positive Emotion was Cultivated by Reciprocal Caring
3. 学会等名 42nd Annual IAHC Virtual Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------